

公開 FD ワークショップ'16 表現教育の可能性（第7回）

表現教育の可能性 北米の大学における日本学の学問的系譜と課題 —ダートマス大学での実践から考える—

James Dorsey

【阿部】 定刻となりましたので始めさせていただきます。本日は、成城大学共通教育センター主催の「公開 FD ワークショップ 2016」にお集まりいただき、ありがとうございます。今日は、晴れ晴れとした青空に加えて、少し暖かい日となりまして、まさに「FD ワークショップ日和」ではないか思います。

「表現教育の可能性」というテーマで毎年開催しています本日の公開 FD ワークショップですが、今回は、「北米の大学における日本学の学問的系譜と課題—ダートマス大学での実践から考える—」というテーマでおこないたいと思います。本日の進行は、私、経済学部で共通教育研究センター所属の阿部勘一が務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

最初に、今回初めてご参加いただいた方もいらっしゃると思いますので、このワークショップの趣旨につきまして、改めて申し上げたいと思います。本学の全学共通教育科目の中に、いわゆる「初年次教育科目」にあたる科目で、「W」「R」「D」と書いて「WRD（ワード）」と呼ぶ科目があります。この FD ワークショップは、「WRD」の指導法や教授法について議論し合うことから始まりました。そこから、「WRD」の授業に通底する「表現教育の可能性」という共通テーマを定めまして、初年次教育において、表現教育にどのように取り組んでいくのか、また、「読む」

「書く」「議論する」ということについて、どのように授業をおこなっていったらいいのか、あるいは、大学におけるこのような科目のカリキュラム体系のあり方などをテーマに、このようなFDワークショップとして実施してまいりました。

これまでのワークショップにつきましては、本センター発行の『共通教育論集』という紀要がございますが、その中に過去のワークショップを紙上再録したものを掲載しております。会場の入口にあります受付に、過去の『共通教育論集』を準備しておりますので、ご興味のある方はご自由にお持ち帰りいただければと思います。

もう一つ二つ、事務連絡的なお話で恐縮ですが、みなさまにお配りしております資料の中にアンケート用紙を入れております。是非アンケートにご記入いただいて、お帰りの際にお出しいただければと思います。

それと、このワークショップを企画しております共通教育研究センターは、来年度、正確には今年（2017年）の4月に創立10周年を迎えまして、それを記念した事業が企画されております。このFDワークショップも、創立10周年記念プレ企画という位置づけで開催しているのですが、来年度以降におこないます本センターの創立10周年記念事業につきましても、リーフレットを作成しております。今日は、そのリーフレットもみなさまに配布させていただきました。お手元のリーフレットも是非お目通しいただければと思います。

さて、事務連絡的なお話は以上にいたしまして、本日のワークショップの講演者をご紹介したいと思います。本日の講演者は、ジェームス・ドーシー先生です。ドーシー先生のプロフィールは、みなさまにメモ用紙を兼ねました紙に記載しておりますので、そちらをご参照いただければと思いますが、現在、アメリカ北部にありますダートマス大学で教員をされております。ドーシー先生のご専攻、ご専門は、日本近現代文学ということですが、日本近現代文学の研究のみならず、今私の手元にありますが……『日本文化に何をみる？』（共和国、2016年）という本の中では、1960年代日本のフォークソングに関する論文も書かれています。文学研究からフォークソングまで、日本文学、文化に関する研究を幅広く研究されております。

ダートマス大学は、みなさんもお存知の通り、有名なアイビー・リーグのメン

バーでもあります。とても有名な大学で教鞭を執られているわけですが、本日は、そのダートマス大学で、どのような教育実践をしているのか、日本学、特に日本語の教授法についての課題というテーマも含めて、お話しいただけるかと思います。

それでは、ドーシー先生にご講演をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

自己紹介とダートマス大学について

【ドーシー】 阿部先生、ありがとうございます。ただいまご紹介にあずかりましたダートマス大学のドーシーです。本題に入る前に、繰り返しになりますが、自己紹介と、私の話の中に出てくるダートマス大学を、簡単に紹介させていただきたいと思います。

私は、大学2年の時から日本語を学び始めました。どうして日本に興味を持ったかといいますと、私が中学校時代から空手をやっていたからなのです。空手を通して日本という国に興味を持つようになり、大学に入学したときに、日本語を勉強することにしました。大学を卒業した後、日本に英語の講師としてやってきて、1年間、岐阜県の公立中学校と高校を回りながら、専門の先生たちの手伝いをやったりしました。その後、約2年間岐阜女子大学で英会話講師として勤めました。このような仕事を通して日本に対する興味が深まるばかりだったので、アメリカに戻って大学院で日本文学を研究することに決めました。修士課程は、中西部にあるインディアナ大学ブルーミントン校で、そこからシアトルにあるワシントン州立大学の博士課程へと進みました。研究テーマは一貫して日本文学でした。大学院を修了したら、運良く、今のダートマス大学に就職することができました。私自身もほとんど信じられませんが、ダートマス大学で教え始めて、もう20年になります。私がそこで勤め出した時は若かったです！20年間、ダートマス大学で教えてきました。

私は文学が専門で、批評家の小林秀雄について研究もしていましたし、それに、小説家でもあり、随筆のようなものも書いている坂口安吾も研究もしています。

最近は、文学だけではなく、日本の文化をもう少し広く見据えて、日本の1960年代の学生運動や、安保闘争に関連した政治性の強いフォークソングと、フォークソング運動を研究しています。これは、楽しくてしょうがないです（笑）。難解な文章で有名な小林秀雄よりも、ずいぶんわかりやすいです。

次に、ダートマス大学について、簡単にお話をさせていただきたいと思います。写真も持ってきました。1769年にできた、わりと歴史の古い大学です。さっき、阿部先生の紹介にもありましたが、アイビー・リーグのひとつです。しかし、アイビー・リーグの中で、一番小さい、一番知られていない大学ですので、よく「The baby of the Ivy League」と言われています。もちろん、私たちはそのように言われることをあまり好まないのですが……。

ダートマス大学は、東海岸のニューハンプシャー州の田舎町にあります。わかりやすくいうと、ボストンから北に向かって2時間ほど車で飛ばしたところにあるハノーバーという町にあります。そこからさらに2時間ほど北に走ると、カナダになります。ダートマス大学のあるハノーバーも、冬はきついですよ。雪がたくさん降ることはダートマス大学のもうひとつの特徴です。

ダートマス大学は、学部生の教育に力を入れている大学です。大学院が設置されている学部・学科もありますが、全体的に見ると大学院まである学部・学科はとても少ないです。理科系の学部・学科、たとえば物理学などは、そのまま大学院まで進んで研究することはできるのですが、文学部で修士課程のある学科は、たったの二つです。一つは、比較文学の修士課程、あとはリベラルスタディズの課程です。後者は、一般教養を2年間勉強して、修士号が取得できるという課程です。

北米の大学における「日本」

では、本題に入ります。このワークショップは「表現教育の可能性」というテーマでおこなわれているとのことですので、私の話もこのテーマに合わせます。一言で説明しますと、北米の大学という仕組みの中で、日本はどのように表現（もしくは表象）されているのかという話、つまり、どの学部のどの学科で、日本が

どう取り扱われているのか。それに、日本がどのように表象されているのかという話をしたいと思います。

それと、もう一つのトピックとして、言葉も取り扱いたいと思います。日本語が、北米の大学、またはダートマス大学でどのように教えられているのか。英語から遠く離れた言葉である日本語ですが、学生が日本語を習って、使って、何をどう表現するかという話もさせていただきたいと思います。

まず、日本がどのように表現・表象されているのかということですが、今日の話に出てくる表現・表象のされ方には、三つのパターンがあるかと思っています。このパターンの説明は、最初は抽象的な話が多いのですが、話が進んでいくにつれて具体的な例も出てきますので、よりわかりやすくなっていくかと思っています。

一つ目のパターンは、「道具としての日本」です。どういうことかと言いますと、はっきりした目的を持った学者が、その目的を達成するために日本を研究する、ということです。言い換えれば、日本の知恵を借りて、目的に達するようにそれを生かすという、「日本を道具として」使うというパターンです。

二つめのパターンは、「資料またはデータとしての日本」です。これは、抽象的な考え、または理論があって、それをより深く理解するために日本を見て、日本をデータとして、資料として使うという、「データとしての日本」というパターンです。

三つ目は、決まった具体的な目的もなく、凝った理論の探求でもなく、ただ単に日本をありのままに素直に見て、研究するパターンです。日本の歴史や文学や社会現象などを調べて、なにが見えてくるのかという好奇心を基盤においておこなわれる日本研究というパターンです。日本研究がアメリカという領域にできた時から今まで、この三つのパターンが入れ替わったりしながら、進化してきました。

アメリカにおける日本研究の歴史 — 戦前 —

アメリカにおける日本研究の歴史の原点はどこにあるかという話をしたいと思います。「日本研究」をどう解釈するかでずいぶん左右しますが、どう考えて

も朝河貫一(1873～1948)という人が、原点にかなり近いのではないかと思います。彼が成し遂げた仕事と残した業績の割には知られていないことが非常に残念です。興味深い経歴の持ち主です。1873年、つまり、明治6年に福島県の二本松市に生まれています。とても優秀な学生で、福島県郡山市にある安積高等学校を卒業し、東京専門学校(現在の早稲田大学)に進み、そこで4年間勉強します。その間、朝河先生はアメリカに留学したいと考えて色々調べるのですが、裕福ではなかった家庭に生まれた朝河先生は渡米が金銭的に無理で、諦めるところに至りました。そこで、東京で活躍していた思想家兼牧師だった横井時雄という朝河先生の知り合いの一人が、当時のダートマス大学の学長を紹介します。ウィリアム・ジュウェット・タッカー(William Jewett Tucker, 1839～1926)学長は、朝河先生の学費を免除して生活費も補助すると約束し、その結果、朝河先生のアメリカ留学という夢が叶います。明治維新が起きて間もないころに生まれた人が、1895年にうちの田舎町にやってくるわけです。それこそ異文化体験と言えるのではないのでしょうか。

朝河先生はダートマス大学を1899年に卒業して、その後エール大学の大学院に入学して、歴史学科で博士号を取得します。朝河先生はその時点では日本に戻らず、ダートマス大学に戻ります。定かではありませんが、ダートマス大学で、1～2年間ほど日本関係、アジア関係の授業を担当することになりました。これが、北米における最初の日本研究ではないかと思います。しかし、ダートマス大学にとって残念なことに、朝河先生はすぐにエール大学に移って、第二次世界大戦が終わるまで、エール大学で日本の歴史を教えます。研究業績も素晴らしくて、特にヨーロッパと日本の封建制度の比較研究が今でも注目を浴びています。英語の著書『The Documents of Iriki』(『入来文書』1929年、昭和4年)がその一例です。

少し余談になりますが、ダートマス大学の卒業生であり、ダートマス大学の教授でもあった朝河先生がきっかけで、ダートマス大学のあるハノーバーという町と、朝河先生の生まれ故郷の福島県二本松市との間には友好都市提携が結ばれていて、私が日本に引率してくる学生が毎年二本松市役所に招待されて、二本松市を訪問します。市役所に表敬訪問をしたり、朝河先生のお墓参りをしたり、二本松市の市民と交流をしたりします。交流が一方的なものではなく、毎年夏に二本

松市から中学生も含めた 10 ～ 12 人の団体がハノーバーとダートマス大学を訪問します。その時、ダートマス大学にあるディッキー国際研究所に常設されている朝河先生の展示を見たり、図書館に保管されている朝河先生の講義ノートや日本から送られてきた絵葉書なども鑑賞したりします。この草の根の国際交流も、この二つの町のつながりができたのもすべて朝河貫一先生のお陰です。余談、以上です。

朝河先生の次に北米に現れた日本研究家が、エドウィン・ライシャワー先生 (Edwin Reischauer, 1910 ～ 1990) です。ライシャワー先生は、日本で活躍していたキリスト教の宣教師の家庭に生まれて、大学に入るために初めてアメリカに渡って、アメリカのオーバーリン大学に入学します。1931 年に卒業してから、そのままハーバード大学の大学院に進みます。9 世紀の慈覺大師という日本のお坊さんの大陸紀行の研究で、1939 年に歴史博士となります。彼の指導教授は、ロシア生まれでフランス育ちの、東京帝国大学初の外国人卒業生であるセルジュ・エリセーエフ (Serge Elisséeff, 1889 ～ 1975) という学者でした。ライシャワー先生が、当時のアメリカにおける日本研究の現状を説明するにはいつもこんな話をしていたそうです。「当時 (1930 年代後半) のハーバード大学の大学院で、東アジアに興味を持っている人は、たった二人しかいなかったのです。自分と、自分の兄、二人だけです。」

ライシャワー先生がハーバード大学で勉強していたこの時代、つまり 1930 年代半ばごろ、日本の文献を集めていたアメリカの機関はたった四つしかありませんでした。国会図書館、コロンビア大学、ハーバード大学、それにカリフォルニア州立大学バークレー校だけです。日本関係の授業を提供している大学は全部で 25 校で、日本語 (つまり言葉) を教えているところはたったの 8 校だったようです。

アメリカにおける日本研究の歴史 — 戦中・戦後 —

次に、今度は日本研究に火がつく世代になるんですが、日本研究者が日本に興味を持つきっかけは、やはり戦争ですね。戦時中に、日本のことを勉強し始める

人たちです。有名な話ですが、『菊と刀』（講談社学術文庫、2005年／光文社古典新訳文庫、2008年）という本を書いた文化人類学者のルース・ベネディクトは、戦時中の代表的な日本研究だと言えるのではないのでしょうか。ルース・ベネディクト先生本人は日本語ができなくて、自分の研究は全て、アメリカにいる日系人を対象にしたそうです。

戦時中の日本研究ですが、最初に紹介した三つのパターンでいくと、これは、やはり道具としての「日本」の研究ですね。日本と戦争が始まりました。戦争に勝つには、やはり敵を知る必要があります。ですから、日本に対する知識を道具として、戦争で勝てる道具として、日本について研究するのです。ベネディクト先生の『菊と刀』も、その一つだったのではないのでしょうか。

私の専門である日本文学ですが、戦後、日本文学をアメリカの大学で教える人たちのほとんどは、やはり戦時中に日本語を覚えているんです。アメリカ軍情報部が作った日本語学校が1941年にできて、軍人として日本語を勉強する世代になるんですが、その中の一人に、アメリカにおける日本文学研究の中でも神様に近い存在であるドナルド・キーンという先生がいらっしゃいます。今はリタイアして、日本に帰化して、日本に住んでいらっしゃるそうですね。ドナルド・キーン先生は、主に日本文学史を英語圏の人に紹介した人になるんですね。日本文学の翻訳も出していますが、彼の書いた日本文学史が一番有名ではないのでしょうか。

同じく、軍人として日本語学校に通って、その後、アメリカの大学で日本文学を教えるサイデンステッカーという人がいます。キーン先生が日本文学史の大家だとすれば、サイデンステッカー先生は、やはり翻訳の名人ですね。特に『源氏物語』の翻訳です。サイデンステッカー先生の『源氏物語』の英訳は、今でも読まれています。

戦中派です。ハワード・ヒベット先生です。江戸文学の研究と翻訳が有名で、彼も他の先生方と同じく、軍人として日本語を覚えた人です。それと、文学ではありませんが、主に日本の映画を研究していたドナルド・リッチーという人がいますが、彼も同じ世代の人です。

この辺の日本文学研究家は、みなアメリカ人で、軍人として日本語を覚えたのですが、戦後のアメリカにおける日本文学研究にとっても尽力した人で、もう一人

紹介しなければいけない人がいます。エドウィン・マクレランという人です。彼は日本生まれ日本で育ちますが、アメリカ人ではなく、イギリス人なんですよ。アメリカのシカゴ大学で、English literature、つまり英文学で博士号を取りますが、大学では日本文学を教えるポストにつきます。とても数多くの弟子がいます。どこの大学に行っても、ほとんどの大学にマクレラン先生の弟子がいるわけですよ(笑)。マクレラン先生のもとで博士号を取った弟子がとても多くて、たとえば、私が勉強していたワシントン州立大学、University of Washington には、日本文学の先生が三人いましたが、三人ともマクレラン先生の弟子です。私がダートマス大学に就職したのはダートマスの大学の日本文学のポストが空いたからですが、どうして空いたかという、マクレラン先生の弟子の一人が別の大学に異動したからだったのです。また、マクレラン先生の弟子ですが……もう一人先生がダートマス大学にいて、今も私の同僚ですが、Dennis Washburn という人、この人もマクレラン先生の弟子です。とにかく、マクレラン先生の悪口は、どこでも言えません(笑)。すごいですよ。彼の翻訳、英訳に夏目漱石の『こころ』の英訳がありますが、とても有名な本です。

この人たちは、戦時中に日本語を覚えて、戦後、いろいろな大学で日本文学を教えるようになるんですが、それと同じように、文学でなく歴史学や社会学、文化人類学などを専門とする同じ世代の人たちがいます。ここで、話がちょっとややこしくなりますが……その人たちが、戦後、大学院に戻って博士号を取得して、どこかの大学に教授として就職するのですが、1950年代の後半あたりは、最初、自分の専門がなんであっても、地域研究を中心としている Department of East Asian Studies、東アジア研究学科みたいなところに所属するんですよ。そのような学科を設けた大学が多いのです。

アメリカの大学に定着する日本研究

1970年代から現在にいたっては、少しずつ進化し、変形していきませんが、日本を研究対象としている人たちが、少しずつではありますが、このような地域研究の学科ではなくて、自分の専門分野の学科に所属していくわけです。日本の歴

史を研究した人が、歴史学科に所属します。日本の社会学を勉強した人が、社会学学科に所属していきます。しかし、文学を研究した人たちは、比較文学学科に所属する人もいないんですが、ほとんどの文学研究者は、ここに書いてあるように、「Department of East Asian Languages & Literatures」、東アジア言語・文学学科、東アジアになっている大学もあれば、アジア全体になっている大学もあったりしますが、このような学科に所属します。

ですから、日本研究のパターンは二つあります。一つは、地域研究としての日本研究です。もう一つは、学問的な専門分野を中心にして日本を見る、日本を研究するものです。前者の地域研究の場合は、どちらかという道具としての日本、つまり、なにか目的があってその目的に達するために日本を研究するものです。後者の場合は、やはり学問的な専門が研究の中心になりますから、日本をデータとして使うことが多いですね。日本を資料、データとして使う。この二つのパターンが、良く言えばお互いに刺激を与え合ったりして、悪く言えば葛藤しながら、日本研究がおこなわれています。

地域研究というパターンから、学問的専門分野中心というパターンに変わろうとしたときに、これは地域研究のほうだと思いますが、大々的なプロジェクトが一つありました。フォード財団がお金を出して、「日本の近代化」という共同研究プロジェクトがありました。プリンストン大学を中心にして開かれた学会なんですけど、3年間にわたって6回も学会をやって、各学会で発表されたものが論文として書き直されて、本として出版されているんです。これのプロジェクト名が、そのまま本の題名になるんですね。このプロジェクトは、1965年から1969年までおこなわれました。

なぜ、日本の近代化をこんなに大々的に取り上げたのかという話ですが、近代化という抽象的なコンセプトがどのようなものを理解するためには、やはり色々なデータが必要で、ヨーロッパではなくて、アジアにある日本という国のケース、ケーススタディとして日本を見るべきだという考え方があって、「日本の近代化」というプロジェクトがあったんです。そのような意味では、この研究での日本は、データとしての「日本」として扱われています。

しかし、それだけではないです。そのプロジェクトの中心的人物をみると、

さっきの話に出てきたような、戦時中に日本語を覚えた人たちが多かったんですが、やはり自分たちが体験した戦争の生々しい記憶もあって、その時点から、さらに他の国も近代化していくことを期待して、日本の近代化の中で、民主主義から軍国主義、国粹主義に変わっていった日本が、どうしてそのような変わり方をしたのか、やはり第二次世界大戦、太平洋戦争のような戦争が二度と起こらないように、他の国が変な近代化をしないように、アメリカはどうするべきかという下心、目的もあったのではないかと思います。つまり、日本研究を道具としてやっているわけです。そのような戦争が二度と起こらないようにするにはどうすればいいのか。日本が軍国主義に落ちたというケースをとにかく見てみましょうという話です。

これは 1960 年代の終わり頃の話ですが、1970 年代になると、日本研究は、「The age of irrelevance」、「irrelevance」、つまり無関係の時代、または役に立たないというようなニュアンスの言葉で言われたりします。これは、ハワイ大学で社会学を教えている、日本を研究の専門としている社会学者のパトリシア・スタインホッフという人が使った表現です。つまり、1970 年代に入ると、日本研究は、はっきりとした目的がなく、誰も役に立つと思っていなくて、それでも日本研究をやっている人は、そのまま研究を続けているんですよ。無関係とか、役に立たないというような表現をすれば、日本研究に対するニュアンスは、かなり悪いものになるんですが……彼女はこの言葉をプラスのニュアンスで使っているんですよ。つまり、どこからもプレッシャーをかけられることなく、自由に日本を見ることができたと。誰にもなにも期待されずに研究ができますから、むしろ自由に研究ができるわけです。それで、1970 年代から 80 年代に向かう世代の人たちは、このような状況の中で日本研究に取り組みました。

具体的な例を文学からもってきますが……これは結局 1990 年代に出た本ですが、カリフォルニア大学サンタバーバラ校だったと思いますけれども、Edward Fowler という人が、日本の文学ジャンルである私小説（わたくししょうせつ）、私小説（しょうせつ）について書いた本があります。完全に私小説（しょうせつ）を日本の独特の文学ジャンルとして研究しているわけです。文学を通して、日本人はどうなのかということを見ようとせず、そして、文学を社会学と関連づ

けるなど、無理に他の学問と結びつけたりしない、純粋な文学研究だと言えます。ピュアな日本文学の研究です。これが、最初に紹介した三つのパターンの中の一つになるんですが、論理としての「日本」、理論としての「日本」として、日本をとらえて研究したものになるでしょう。

ダートマス大学における日本研究

そのような戦後の日本研究の歴史があって、それがダートマス大学でどのように構築されていったのかについて、簡単に話したいと思います。ダートマス大学には、1974年に「Asian Studies Program」が創立します。アジア研究、地域研究ですね。どの大学にでもよくあるような、アジア研究学科です。先生たちが、みんなそれぞれ自分の専門分野の学科に属するんですよ。日本の歴史をやっている人は歴史学科、社会学の先生は社会学科に所属しているんですが、みな同じアジアを研究している人が集まったほうが話も合うし、お互いに刺激を与え合って研究したいということで、「Asian Studies Program」というものを立ち上げます。だから、先生が所属するのはあくまで「Department」ですが、それにプラスしてプログラムに参加する先生がいるわけです。

このプログラムは長く続きましたが、1995年には、文学と言語を中心とした学科「Department」ができます。「Department of Asian and Middle Eastern Languages and Literatures」、これはちょっと珍しいタイプです。アジアはわかりますね。中国語・中国文学、日本語・日本文学を一緒にするのは、それなりに理屈は成り立ちます。そこに、中近東のアラビア語とヘブライ語、アラビア文学、アラビア語で書かれた文学、ヘブライ語で書かれた文学をアジアのものと一緒にするのが、とてもおかしいですね。このような学科編成は、あまり意味が理解できないのですが……このような学科ができたのにはそれなりに理由があって、アジアや中近東の言葉を勉強しようとする学生がまだまだ少ないのと、それとちょっと変わった言語という共通点があって（笑）、一つの学科に入れてしまいました。この学科は、現在でも同じ形であるんです。しかし、この学科に所属する先生は、文学をやっている先生ばかりですから、意外と話が合いますね。同じ

理論を使ったり、同じ観点で小説を読んだりしますから、この学科は、それなりに機能しているかと思います。

しかし、日本を異なる観点から研究している人もいたりして、ダートマス大学には、日本の美術史の専門家や歴史の専門家もいます。その先生たちは、それぞれ美術史や歴史の学科に所属しながら、プラスして先ほどの話に出てきたプログラムにも参加したりします。

では、学生の専攻とかはどうなるかという話になりますが、これもまたややこしいです。言葉と文学だけをやりたい人たちは、「Department of Asian and Middle Eastern Languages and Literatures」に入りますね。しかし、日本の歴史にとっても興味がある学生がいるとします。その学生は歴史学科に所属してもいいんですが、その場合は、うちの学科で受ける日本語のクラスは単位にカウントしないですね。だから、専攻でやらなきゃいけない授業プラス、言葉の勉強をする科目もあるのですが、単位にカウントしないのを嫌がって、言葉の勉強をする科目を取るのを嫌う学生がいますね。では、日本の歴史に興味があったとして……うちの学科は日本に関係する授業だけを取ってもいいのですが、その場合は、好きな歴史の授業ではなくて、文学の授業になってしまいます。そのことを嫌がって、日本の歴史を専攻にしない学生がいたりします。そのような学生たちのために、このプログラムがあるわけです。プログラムでは、なんらかの形で関係のある授業をかき集めて、カスタマイズした専攻を作ることができます。日本語、言葉の授業をたくさん取ったり、文学の、文学史の授業を一つくらい取って、あとは日本の歴史の授業をたくさん取って、あとは、歴史学科にある歴史の方法や理論などの授業をかき集めて、一つの専攻にするということもできます。

アメリカにおける日本語教育の変遷

次は、私の個人的な話になってしまいますが……私は、1980年代前半、学部学生のときに日本語を学び始めましたが、この頃は、ちょうど日本語を学んでいる学生の興味が変わろうとしていた頃です。私と同じ頃に日本語を学び始めたほとんどの学生は、日本の伝統文化に興味があったのです。私は空手、友達のジェ

フは仏教、特に禅、座禅を日本でやりたいと。あとは、日本の龍安寺などの石庭、または庭園の作り方とその裏にある思想に興味があるデーヴという学生がいました。日本の伝統的な文化に興味を持つ人が多かったわけです。

私がちょうど大学に入った頃、1980年代後半になると、日本語初級の授業も手伝わせてもらいましたが、当時の学生たちの興味は、やはり日本のビジネスですよ。エコノミック・アニマルのジャパンでしたから、やはり日本語ができると就職には有利だし、日本の企業に就職することもできるし、経済学を専攻して日本語を勉強している学生とか、あとは、ビジネススクールに通いながら日本語を覚えるという、そのような時代もありました。

それで、1990年代前半になりますと、これは私が大学院生だった時代と重なるんですが、日本語のクラスには、日本のテクノロジー、特にロボット工学に興味を持っている学生がいました。自分の研究のために資料を調べているとき、論文の概要を読んでいて、「ああ、自分の研究にぴったり合っています、これを読まなきゃ」と思って論文を読もうとすると、概要は英語で書かれているのに、論文の本体は全部日本語で、読めませんと（笑）。このような動機で、日本語を勉強し始める学生がいましたね。長く続いた学生はいないですけども（笑）。そのような時代もありました。

1990年代の後半になると、これは今も変わらないんですが、日本語を勉強する学生の動機はなんでしょうか……。アニメですよ、アニメ。日本のアニメです。私は、「ポケモン世代」と呼んでいるんですが、ポケモンがちょうどアメリカで流行った時代に子どもだった世代ですね。「ポケモン世代」で、アニメを日本語で見て、理解ができるようになったらいいなという動機で入ってくる学生が多いですね。

「ポケモン世代」で、アニメに興味のある学生が入ってくるのもあれば、もう一つ別のタイプの学生がいます。高校でフランス語かスペイン語か、ヨーロッパの言語を勉強して、自分は外国語をマスターする才能があると自信を持っている学生です。そのような学生は、難しいと言われている言葉に挑戦してみたいと日本語の難しさに惹かれるわけですよ。そのような学生は、日本語を選ぶのか、中国語を選ぶのか、アラビア語を選ぶのか、ロシア語を選ぶのか、そこはもうアッ

トランダムという感じで、どれか適当なクラスに行ってしまう。日本語の難しさに惹かれてやってくるんですよ。日本語の難しさにですよ (笑)。それにしても、日本語はやはり難しいですね。私も、勉強し始めて30年以上になりますが、今でも苦勞しています。

アメリカの政府機関で、The United States Foreign Language Institute という国の外国語 institute の調査によると、英語を母国語として話す人は、フランス語やスペイン語、つまり英語にわりと近い外国語を、仕事で一応使えるレベルになるのに必要な時間は480時間だそうです。これは、きちんとした外国語のコースで集中的に勉強した場合の時間数ですね。それでは、日本語、中国語、韓国語はどうでしょうか……、1,320時間だそうです。フランス語やスペイン語の3倍ぐらいですね。きちんとしたコースの中で集中的に勉強して、仕事で一応使えるレベルぐらいになる時間が、1,320時間です。

これを、大学の教育で考えてみましょう。大学4年間で、一応8学期あると考えます。計算したのですが、1～4年生まで毎学期その言葉の授業を取って、結局、毎日2時間ぐらい集中的に勉強しないと、そのレベルまで達することはできません。これはきついですよ。

日本語能力試験というものがあるんですが、いろいろな級があつて、1級がトップで、1級をクリアすれば、一応、日本の大学で勉強ができるでしょうと言われているんですが、私がダートマス大学で20年間教えていて、1年生でゼロからスタートして、4年生で卒業するまでに、日本語能力試験の1級をクリアできた学生は、たった一人だけでしたね。その学生は、ずっと日本語しか勉強していなかったような気がします (笑)。

日本語教育の話が続けます。北米、もしくは英語圏における日本語教育と言え、この人の存在がとても大きいです。エレノア・ハーズ・ジョーデンという先生なんですが、1962年に、『Beginning Japanese』という教科書を出版しています。1960年代から70年代のアメリカの9割ぐらいの大学が、この教科書を使って教えていました。私もこれで勉強しましたよ。もう、見るだけでトラウマが蘇ってきて (笑)。もう、逃げたくなりますよ。この教科書は1962年に出版されていますが、その後アップデート版も出ました。1987年と1990年に、2冊シリーズで

出版されるんですが、『Japanese: The Spoken Language』という教科書です。これもジョーデン先生が作った教科書なんです。とてもいろいろな特徴があるわけですよ。その一つは、この題名にあるように、『Japanese: The Spoken Language』、つまり話し言葉としての日本語ですね。話せるようになるのが目的で、読むことは放っておくんですよ。話せるようになることが目的なので、教科書が全てローマ字なんですよ、ローマ字表記（笑）。「ふざけんなよ！」と言いたいですよ。日本語を勉強したいのに、なんでローマ字を読まなきゃいけないんですかと。

それで、この教科書で使われているローマ字は、ジョーデン先生が考え出したユニークなローマ字なんです。ひらがなを意識して、ひらがなが見えてくるようなローマ字にしているわけですよ。たとえば、サ行は、「さ」、「sa」、それはわかりますけど、「し」は、「shi」と書かずに「si」と書くわけですよ。パターン化したいわけです。二文字で書きたいから、「h」はなしです。「su」「se」「so」はそのままでオーケーですが、今度はタ行だったらどうでしょうか。「ta」、オーケーです。「ち」は「chi」と書かずに「ti」と書くわけですよ。「た、てい、とう、て、と」になりますね（笑）。教科書がローマ字で書かれていて、このような変なローマ字の書き方のために、変な発音を覚えてしまった学生も数多いんですよ。「しんじゅくのていずをかいてください」というような日本語になってしまいます（笑）。ちょっと大げさに言っているかもしれませんが、少し付け加えます。ほとんどの大学では、この教科書を使っている、ひらがなとカタカナで書かれたものをプリントして、学生に配付しています。ひらがな、カタカナを覚えさせますね。プラス、途中で漢字も入ってきますけれども、でも、教科書自体には、それは書いてないわけですよ。

ジョーデン先生の教科書はこのようなものです。全てローマ字です。ジョーデン先生が信じている外国語教授法は、「オーディオリンガル法」です。これは、心理学者のスキナーという人の行動主義、behaviorism が背景にある考え方ですが、behaviorism、行動主義とは、わかりやすい例でいうと、自分の飼っている犬に、「お座り」「お手」というのを教えるときに使うやり方です。やらせる、なんとかしてやらせて、きちんとできたら褒美をあげる。できなかつたら叱る。それを繰り返すうちに身につくと。この方法を外国語教授法に当てはめると、pattern

practice、つまり文章を繰り返してパターンを覚えて、単語を入れ替えていくわけです。まず、教科書に出てくる文章を学生に暗記させます。「昨日、病院に行きました」と。それで、授業にやってくるときには、「病院」を「図書館」に入れ替えて言えるようにします。「昨日、図書館に行きました」と。「本屋さん」に入れ替えて、「昨日、本屋さんに行きました」と。延々とそのような練習をするわけですよ。それで、授業での練習に加えて、今はもうほとんどなくなりましたが、カセットテープを聞きながら、その練習をするわけですよ。嫌で嫌でしょうがなかったんですよ。退屈でしょうがないですよ。

そのような本で日本語を覚えた人が、とても多いわけです。ややこしい文法の説明も入っていたりします。これが、さっき言った pattern practice です。「太田さんには連絡したね?」、「部長さんに連絡したね?」というように、「太田さん」を「部長さん」に入れ替えて練習していきます。

1980年代、ビジネスで日本語をやりたい、日本語を使いたいという世代が大学に入ってくる頃の話ですが、いろいろな大学が、日本語初級のコースを立ち上げたいと構想していました。しかし、日本語が教えられる人材がとても少なくて、アメリカの大学は困っていた時期だったんですね。ちょうどその頃、この教科書を作ったジョーデン先生が、日本語教授法のシステムを作るんですよ。日本語の先生になりたい人たちに、日本語教授法のトレーニングをさせて、その人たちをあなたの大学に紹介しますよというシステムを作るわけです。大学は人材が不足していますから、喜んで受け入れます。大学で研究するというほどの専門家、研究者ではないですから、とても低い給料で、有期契約で雇えるわけです。それで上手いかなかったら……、まあ使い捨てですね。教授でもない、「使い捨て日本語講師」みたいな形ですから、大学としてはもってこいの話なんですよ。しかし、このシステムが、とても上手くいけます。日本の大学を出た人が、夏に開かれるジョーデン先生の10週間の集中講義を受けて、そこで覚えた日本語の教授法を携えて、アメリカのどこかの大学で立ち上げられた日本語のコースで教える仕事を得るわけです。給料が低い有期契約なので、雇用が安定しないことから躊躇する人も結構いましたが、受け入れる大学の多くは、そのような日本語講師に、勤務する大学の修士課程に所属して、学費免除で勉強してもいいですよとい

う制度を作るわけです。雇用条件が悪いぶん、そのようなプラスの条件をつけるわけです。その制度に惹かれてやってきた人が多いですね。多くの大学で、日本語を教えながら、タダで修士号が取れるわけですからね。

ただ、ちょっと考えてみてください。日本の大学を出た人がいきなりアメリカへ行って、大学院の修士課程でやっていける人は、英語の能力は、かなり上のレベルでないとはいけません。英語のレベルが相当高くないと、大学院でやっていけません。ということは、そういう形でアメリカにやってきて日本語の先生になっていく人たちのほとんどは、日本の大学では、日本の文学や文化、歴史、社会といった分野の専門家ではなくて、英語の専門家だったわけですよ。英語の言葉を学ぶことが専門という人やってくるわけです。

ジョーデン先生のワークショップで教授法を教わって、それで一応、日本語の授業はできるようになるんですが、プラスアルファがないわけですよ。そうやって、アメリカにやってきた人たちは、日本の文学や文化、歴史、社会といったことを勉強してきたわけでもないし、興味があったわけでもないです。英語の専門家ばかりで、別の専門的な知識を持っていることはなかったです。それで、アメリカの大学で日本語を教えるんですけども、日本語を言葉として教えるだけであって、日本の文学や日本の歴史など、日本を対象にした専門的な研究と重なるところがないわけです。学生たちが、日本語の授業で日本語を使う。結局、学生は、日本の文学や歴史の授業は、全て、英語で勉強します。日本語を勉強することと、日本の文学や歴史を学ぶことが、分離しているわけですよ。望ましくない状況が今でも続いています。

言語と文学・文化との間にある「高い壁」を超える日本語教育実践

私は、言語を学ぶことと、文学や文化を学ぶことを分離している高い壁を、なんとか壊したいと思っていました。私は、最近、2年生が受ける日本語の授業を教えるようになりましたが、その中で、日本語を習いながら、日本語そのものだけでなく、日本に関することをなにか日本語で習いませんかと。文化でもいいし、文学でもいいですが、なにか同時に習うことができないのでしょうかということで、

実験的に授業をやっています。私の日本語の授業では、ジェンダー、または恋愛観をトピックに、日本語を教えています。

教材として使っているのは、日本のラブソングがほとんどです (笑)。これが、自分でいうのもおかしいんですが、上手くいくんですよ (笑)。面白いですよ。私は、必ずこの歌で授業を始めるんですよ。泉谷しげるの《愛してるよ》という歌です。短い歌ですので、ちょっと聴いてください。

《愛してるよ》(作詞・作曲：泉谷しげる) を流す)

【ドーシー】 いいでしょう (笑)。この歌を使う理由は色々あるんですが、第一に、わかりやすいことです。1年間、実質9ヶ月しか勉強していない学生でも、もちろん、中にはわからない単語もありますが、だいたい理解できます。それプラス、日常生活で使える文法のパターンが出てきますね。この歌には、「～してもいい」「～しなくてもいい」というパターンが、2、3回くらい出てくるんですが、日常生活で使えるわけですよ。その文法パターンを覚えたときに、付け加えて、「～してはいけない」というのも導入していきます。セットで覚えたほうがいいですね。

それが日本語、言葉の勉強としてやることですが、私は、それにプラスアルファを付けたくて、なにをするかというと……このような宿題を出すんですね。歌を何回か聴いて、歌の中の語り手がもう少し歌うなら、どのようなことをいうでしょうかと。それで、学生がさっきの文法を使って、文章を書いてきます。なにを書いてくるかというのは、もう決まっているわけですよ。同じ答えばかりが出てきます。「クレジットカードを使ってもいいよ」。男の人が好きな女の人に、「掃除をしなくてもいいよ」、「ケーキを食べに行ってもいいよ」、「お皿を洗わなくてもいいよ」というような文章が出てきますね。

学生たちは、自分のたどたどしい日本語に自信がなくて、この宿題をやるときには、まだ深く考える余裕もない。そこで、一番手取り早い宿題のやり方として、ジェンダーのステレオタイプを持ってくるわけですよ、ものの見事に。これで、言葉を覚えるときには、言葉に加えて、その言葉の裏にある世界観や価値観、

ジェンダー観、結婚観、恋愛観もついてくるわけです。子どもの頃、母国語を自然に覚えるときには、そのような世界観などを意識せずに覚えてしまっていて、私たちがみんな持っているいろんな偏見は、その言葉を覚えると同時に、無意識的に覚えてしまうものなんです。大人になって外国語を勉強したときには、そういうプロセスが見えてくるわけですよ。あとで、英語になってしまうところですが、学生たちにこれをやらせて、なぜこのようなステレオタイプのものしか持ってこないのと言います。私たちも、言葉を覚えようとしている段階で苦勞してしまうので、クリティカル・シンキングを生かす余裕がないわけです。それを意識するわけですよ。

今度は、女性が歌いそうなアンサーソングを書かせます。もし、歌の中に出てくる「君」という女性が、「彼」に歌を歌うんだったら、どのようなことを歌うんでしょう。また、ステレオタイプのものが出てくるんですね。全く同じです。「給料が高くなくてもいいよ」、「会社で偉くならなくてもいいよ」、これは、アメリカだけですかね……、「トイレの便座を下げなくてもいいよ」と。日本でも喧嘩になりますか。授業では、このようなことをやっています。

母国語を覚えようとしている子どもも、大人として外国語を覚えようとしている大学生でも同じです。誰しものが、はっきりとした形で言われたことはないでしょうが、言葉が持っている常識や世界観を、日本語を覚えながら同時に覚えてしまおうというのが、この授業で課題として考えているものの一つです。文化と言葉の密着した関係ですね。

最後にもう一つ、ちょっとだけ聴かせたい歌があります。歌を聴いて恋愛を考えるという私の授業を受けた学生で、私がもう一つ担当している翻訳のクラスを受けた学生がいて、その学生が、自分のプロジェクトとして、日本の歌を歌えるような英語に翻訳して、楽器も自分で弾きながら歌うというのをやりました。歌は、おそらく聴いたことがあると思います。

《傘がない》（作詞・作曲：井上陽水）の英語訳による演奏を流す）

【ドーシー】（音を途中で止めて）この歌は続きますが、日本語の歌を自分の作っ

た英訳で歌ったり、日本語のままで歌ったりするというものです。

私の話は、これで終わりです。簡単でざっくりではありましたが、アメリカにおける日本学の系譜と歴史、それに日本語教育の歴史と現状を、紹介させていただきました。なにかのためになるのなら、光栄に思います。ご静聴、ありがとうございました。

(拍手)

【阿部】 ドーシー先生、ありがとうございました。とても興味深いテーマなうえに、アメリカの大学での実践をうかがうと、日本にいるとなかなか触れられないことなど、いろいろと話題が豊富で、興味深い話題や考えを発展させられるような話題が多くあったと思います。後半は、今のご講演を踏まえまして、ディスカッションをしたいと思います。

ここで、後半のディスカッションまで、10分ほど休憩をとりたいと思います。10分後に、またこの会場にお集まりいただければと思います。

質疑応答

【阿部】 では、FDワークショップを再開したいと思います。ドーシー先生のご講演を受けまして、まず、私から、少し質問を……と言いましても、質問することがないほどに完璧なお話でしたので(笑)、ドーシー先生のお話を受けて私が考えたことをいくつか話したいと思います。

まず、先ほどの話に、少し補足したお話をいただきたいのですが……、特に最後に話されていたドーシー先生の日本語の授業実践について、私としてはとても興味深く、そしてとても感心いたしました。ドーシー先生の授業実践の中には、日本語という言語をどのように教えるかという教授法や、日本語そのものを習得することだけでなく、日本学という観点から、学んでいる言語を、使っている日本という国の歴史や文化、文学について学ぶことが大事であるという考え方が

あったかと思います。翻って、日本で英語を学ぶことや、英語をどのように教えるか、習得させるかについての議論、これは、ドイツ語であれ、フランス語であれ、中国語であれ、日本における母国語である日本語であれ、同じ問題だと思いますが、日本における外国語教育の方法やあり方のようなものに関する議論、日本における外国語教育、とりわけ英語教育が抱える問題や、それに関する議論にとっても似ていると思いました。アメリカからみた外国語としての日本語教育と、日本からみた外国語としての英語教育の課題、問題が、シンメトリーな関係にあるのだなと、その点がとても強く印象に残っています。

これは、日本語でいうところの私の「コンプレックス」もあるのですが、中学校から英語を勉強しているのに、英語ができるようにならないではないかという……、まあ、私の場合は、単に勉強が足りないだけかもしれませんが（笑）。私も、中学校の英語の授業は、会話の授業が多くて、会話の中に出てくる場所や状況をもとに、先生がアメリカの話を説明したりして、本当に楽しかったんですね。それが、高校以降、英語を勉強するモチベーションがどんどん下がって、どんどん嫌になって……、大学受験対策も必要だったので仕方なかったとは思いますが、大学受験対策に追われるように英語を勉強することが全然楽しくなくて、嫌になった経験があります。

日本でも、英語の授業は読み書きを重視していて、その結果、あれだけ英語を学校で勉強していても話せないのではないかという批判があって、日本の英語教育には大きな問題があるという議論、論争があります。もちろん、英語ができることと話せることがイコールかどうか、イコールとみなすこと自体の正否という問題もありますが。このような外国語教育の問題は、日本だけでなく、アメリカでも同じなのだと思ったわけです。

日本では、英語ができることが第一義におかれていて、もちろん英語だけではないのですが、たとえば、大学生でも社会人でも TOEIC 最低 600 点を目指せとか、英語教育の目標が、資格試験と相まっておかれているんですね。資格試験になっているので、資格を持つことが勉強の目的になるんですね。

英語ができない私は、「TOEIC600 点を取ったから、英検△級取ったから、それがどうしたの？（So what?）」と、よくひがみながら思っています。ただ、こ

のひがみは単なるひがみではなくて、大事なのは、単に英語ができることではなくて、英語で何を勉強するのか、研究するのかが大事だと思うんです。行動主義的に身体に英語を埋め込むトレーニングをして、それを身につけたことだけが大事ではなくて、身につけた英語で何をすることが大事だと思うんです。たとえば、英語という言語を学びながら、英語を使っているアメリカやイギリスの国の文化や慣習、歴史などに興味持ち、同時に学んでいく。あるいは、英語を話す国の文化や慣習、歴史などに興味を持っていて、ある程度英語を学ぶ動機付けがある人が、どのように英語という言語を身につけていくか、興味のある対象と関連づけて英語を学んでいるのか、教える側もどのように関連づけて教えるのかということは、とても重要なトピックだと思います。しかしながら、日本では、このような学びに対する考え方や学びの方法が大事だといっても、それが上手くシステム化されていない、あるいはできていないなど、強く感じたんですね。

そのような点からすると、ドーシー先生が最後に紹介された井上陽水の『傘がない』を英訳して歌うという学生の実践は、とても面白いなと思ったんですね。この学生は、日本語という言語を技術的に理解するだけでなく、日本語で書かれた言葉、この場合は歌詞ですが、歌詞にある言葉の意味を、日本人の思考や価値観、その背景にある文化や歴史を踏まえながら学んでいるなと思うんです。

日本でも、たとえば私が中学時代使っていた教科書には、カーペンターズの《Sing》や、ボブ・ディランの《Blowing in the Wind》、スコットランド民謡の《My Bonnie》が載っていました。歌を聴いて英語に興味を持ちましょう、英語を覚えましょうという意図でしょうが、それだけなんですね。あるいは、学校の先生で、昔バンドをやっていたとか、ロック・ミュージックが好きですとか、ビートルズが大好きですという人が、たとえば、授業で生徒にビートルズを聴かせて、「良い曲でしょ」とか言ったりして、「この歌の歌詞をちょっと、覚えてみよう」とか、「意味を調べてみよう」ということは多少あるのですが、授業を受けている生徒からすれば、英語としては学んでいるけれども、しかし、英語という言葉以上のことを学んでいるわけではないと思います。英語を学ぶ動機付けにはとてもよい方法だとは思いますが。

話を少し戻しますが、私が中学高校の頃に英語の授業を受けていて、たとえば、

アメリカという国がどのような国であるとか、これは社会科や地歴科で習うことかもしれませんが、アメリカの場所、地理や歴史などについて触れることはほとんどないですし、触れたとしても実感がわからないんですよね。それこそ、ドーシー先生が教鞭を執られているダートマス大学なんて、私は、恥ずかしながら、ドーシー先生にお目にかかるまで、ダートマス大学ってどこにあるのか、全く知らなかったんです（笑）。

【ドーシー】 存在していることも知らなかったでしょ（笑）。

【阿部】 いや、さすがに存在していないとまでは思いませんでしたが（笑）。ただ、興味や関心がないと、アメリカの地理も漠然としたレベルでしかわからないんですよね。ニューヨークやワシントン D.C. が地図の右端にあって、ロサンゼルスが左端にあるくらいしかわからないんですよね。勉強している言語を使っている国や地域のことがわからない、興味関心を持たない、持てない、言語を使っているリアリティが感じられないというのは、ドーシー先生がおっしゃっていたプラスアルファの部分をどのように教えるかということがないからだと思うんですね。そのプラスアルファのことについて、ドーシー先生がいろいろ実践されていることや、実践しながら考えていらっしゃることを、補足としてもう少しお話をうかがいたいと思うんですが、いかがでしょうか。

【ドーシー】 ありがとうございます。ただ、学生の中には、日本語のための日本語の勉強という考え方で学び始める学生もいます。さっきの話にも出てきましたが、日本語の難しさに惹かれて挑戦したいという学生がいるんですが、そのような学生は、結局、長続きしないんですよ。日本語を学ぶのに、他に何か興味や関心が無ければ続かないんですね。

日本語の授業については、アメリカの大学だったら、たぶんどこでも同じようなやり方をしていると思います。最初の2年間は、話すことを中心にやります。日常会話ができるように、会話でよく使うことを教えます。3年生ぐらいになると、やはり、読むこと、書くことが中心になってきますね。読むこと、書くこと

が中心になってくるということは……、漢字ですね。漢字を覚えなければいけないのです。漢字を覚える段階で挫折してしまう学生が、非常に多いです。ですから、その前の段階で、日本語のための日本語の勉強ではなくて、日本語を勉強しながら、その他にプラスアルファがあって、「私は日本語以外に同時にプラスアルファのことを学べているんだ」という印象を、学生に与えようとしているわけですよ、私は。私の試みがどこまで成功しているかはなんとも言えませんが、4年間、日本語を勉強をし続けてくれる学生はいます。最初は、言葉を覚えるだけのために、言葉だけに興味があって学び始めたけれども、その途中で、文学に興味を持ったりアニメの研究をやりたくなったりする学生は結構います。

先ほどの話の最後に見せた映像、井上陽水の『傘がない』を歌っていた学生なんですが、彼は、日本の歌を英訳して、英訳した歌を自分で歌って演奏して、それを映像にまとめることを、卒業プロジェクトとしてやっているんですよ。卒業論文の代わりにやったものですが、日本の歌をいくつか、全部で3曲か4曲くらい、同じように英訳をして、アレンジを変えて演奏するというをやっているんですね。ただ、それだけではなくて、プラスして論文を書いているんですね。自分はどうしてこのような訳をしたのかという解説や、歌のアレンジの特徴、国によって曲のアレンジの意味や、アレンジが与える印象が違うというように考えていて、日本で育った人が日本語で井上陽水の歌を聴いて感じたことを、アメリカで育った人が、英語で歌を聴いたときに同じように感じるようにするには、聴いた感じを再現するには、どのように編曲すればいいのかも、彼は考えて実践しているんですね。たぶん、彼は、何の根拠もないようにやっているんですけども、彼なりに想像を働かせてやっているのだと思います。彼の研究は、ひとつのアイデアとして、結構面白いと思いました。

ですから、なんて言うんですか……、言葉を生かしながら、言葉で表現することにあたって、他に何が考えられるかということが、このように生まれてくるときもあります。その刺激を与えなければいけないのは、私たち教える立場の仕事ではないかと思いますね。

【阿部】 ありがとうございます。今の話で、一点うかがいたいことがあります。1、

2年のとき、話すことを学ぶときに、今お話いただいたような実践などをされていると思いますが、学生の日本に対する興味関心の対象や度合いは、どのような感じなのでしょうか。具体的に、たとえば、先ほどもおっしゃっていたアニメ世代であるとか、ポケモンが好きで日本に興味を持ったとか、いろいろな興味の持ち方があると思うんですが、学生さんは、どのようなものに興味を持って、日本語の授業を受けようとするのかということですね。現在いる学生さんの場合、どのような感じなのか、うかがってよろしいでしょうか。

【ドーシー】 それは、やはり、日本のポップカルチャーですね。アニメが中心ですね。日本のマンガを読んでいる学生もいます。日本のマンガはたくさん英訳されていて、アメリカで買える日本のマンガの量はすごいですよ。本屋さんに行けば、ダースと、英訳された『ドラゴンボール』とか……。私もよくわかりませんが（笑）、たくさんありますね。日本のマンガ文化に興味を持って、日本語をやり出す学生も結構いますね。

私は、日本語の授業だけでなく、毎年教えている「日本文化史」「日本文化史入門」という授業も担当しています。英語で教える授業で、ダートマス大学の中では、結構大きいクラス、60～70人ぐらいの学生がいるクラスです。日本の文化史を、文学作品を通して紹介する授業で、『万葉集』から吉本ばななまでを、10週間でやりますよ（笑）。日本では考えられないような授業ですね。日本の文化には色々ありますからというような感じで、広く浅く教えるんです。日本でもやっていると思いますが、学生に対して授業評価アンケートをやるじゃないですか。その授業アンケートに、結構たくさんの学生がコメントを書くんですが、このようなコメントがあります。「この授業を受けて良かったと思います。私の大好きなアニメが、よりよく理解できるようになりました」と。宮崎駿のアニメには、日本の歴史から引っ張ってきたイメージや、モチーフがあるじゃないですか。私の授業を受けることで、宮崎駿のアニメをより深く理解できるというか、より楽しく見られると思うんですね。多少、がっかりするところもあるんですが、学生にはそう言われています。でも、きっかけはなんでもいいじゃないですか。私の仕事は、そのきっかけを広めていくことですので、これからも頑張りたいと思

います (笑)。

【阿部】 きっかけがあって、それについて深く学びたいというときに、ダートマス大学では、今おっしゃった「日本文化史入門」のような授業やカリキュラム体系が、きちんと揃っているのでしょうか。

【ドーシー】 ダートマス大学には、日本語と日本文学という専攻があります。ダートマス大学は、リベラルアーツの大学ですから、専攻があるといっても、専攻で取らなければならない必修科目は、他の大学と比べると、とても少ないのです。ただ、それでもある程度きちんとしたコースがあります。4年間日本語の勉強をして、それにプラスして、文学の授業を四つ、文学理論の授業の一つ取るというきちんとしたコースがあります。文学以外で日本に関する研究をしたい場合、たとえば、歴史プラス日本、文化人類学プラス日本、このような場合だと、カリキュラムの体系は、かなり曖昧になってきますね。これは、日本でも同じかどうかわかりませんが、アメリカ、たとえば、ダートマス大学には文化人類学の学科はきちんとあるんですが、アジア地域のことを研究している人は一人もいません。経済学科もありますが、日本やアジア地域の研究をしている人は一人もいないのです。そのような専門の学科では、研究対象としている地域を考えずに、専門分野を中心に考えて人事採用をするんですね。だから、医療社会学の新しい先生を雇おうとするときには、研究対象がインドであろうが、アメリカであろうが、日本であろうが、関係ないのです。医療社会学の研究者なら、医療社会学という分野の中で優秀な人を雇う。ということは、文学以外の学部では、日本を対象に研究をしている先生は、多くても一人だけです。二人いることは、まずないわけです。ですから、文学以外では、日本だけ、アジアだけを対象にして研究しようと思う学生は、なかなか難しい状況になっていますね。

【阿部】 大学という枠組みで考えた場合、どうしても専門の discipline 単位で組織が構成されていて、当然 discipline 単位でスタッフがいて、研究活動もされていくことになりますね。先ほど、ダートマス大学でドーシー先生が所属する学科

の変遷についてお話をされていましたが、いわゆる地域研究、area studies という学科やコースだと、たとえば、言葉を書いたり話したりすることを教える立場としては、文学のスタッフは、当然たくさんいると思うんですが、文学が専門のスタッフが多い中で、先ほどドーシー先生がおっしゃった、文学や言葉以外に、文化や歴史、経済などに興味を持たせるとか、興味を持つ学生をどのように教育するかという問題もあると思うのです。たとえば、ドーシー先生は、discipline は文学だけでも、先ほどの「日本文化史」の授業で、まさにプラスアルファを意識したとても面白い実践をされていると思うのですが、言語や、あえて文学と言いますが、ある地域について言語や文学以外のことに興味を持って勉強したいという学生を、どのように伸ばしていくか、ドーシー先生の個人的なお考えやポリシーがいろいろあるのかなと、私はお話をうかがっていて興味を持ちました。

といいますのは、私の知り合いに、ドイツ人で、ウィーン大学の哲学文化学部東アジア学科日本学専攻 (Japanologie, Philologisch-Kulturwissenschaftliche Fakultät, Institut für Ostasienwissenschaften, Universität Wien) で以前教えていた人と、フランス人で、リヨン第三大学の外国語学部日本 (語) 学科 (Département d'Etudes Japonaises, La Faculté des Langues, Université Jean Moulin Lyon 3) で、現役で教えている人がいます。どちらも、文学や言語学といった特定の discipline の専門家だけでなく、日本の文化や社会、経済の専門家もいる、ある意味 area studies のような、日本を研究対象にしたような学科、専攻です。二人とも日本語を教える授業を担当しているのですが、どちらも、日本語、言語、文学の専門ではないんですね。ドイツ人は、あえていえば民俗学で、三陸地方の漁村の研究をしています。フランス人は、これもあえていえば社会学、経済学で、日本の美術市場の研究をしています。どちらも、言語を教えることが専門ではないんですね。ですから、日本語をどのように教えるか、学生の日本語習得の仕組みや方法の開発、モチベーションを高めるための仕掛けづくりなど、いろいろ苦労しながら実践しているという話を聞きました。

ドーシー先生も、このような、ある意味 area studies のような学科に所属されていると私は認識しているのですが、そのような組織で先ほどのような教育実践をされている中で、組織について、あるいは、組織の中での教育体制や教育実践

について、問題だと思っていることがあれば、お話をうかがいたいと思います。

【ドーシー】 はい。まず、地域研究、area studies についてですが……、アジアや東アジアにしても、日本にしても、20～30年ぐらい前までは、地域研究といって、日本語を少し学習して、日本の歴史の授業を一つ、文学の授業を一つ、政治学の授業を一つ取って、それを日本の地域研究というひとつの専攻というふうにしてやっていました。しかし、最近、地域研究はあまり高く評価されなくなりました。結局、一つの学問的分野に徹してない、確固とした discipline がないから望ましくないと思われるようになりました。最近では、area studies という言い方をやめて、interdisciplinary、いくつかの分野をミックスして、それぞれの分野の盲点、blind part を探りながら、文学ばかりだけ学んでいるとある部分の分析ができないから、たとえば政治学も学びましょうというように、interdisciplinary という言い方も流行っているし、それを実践している専攻もあるのですが……、ほとんどの所は、interdisciplinary と言いながら、地域研究のままなんです、昔のまま(笑)。これが問題なんです。これについては、いろいろ意見が分かれますが、やはり、私は一つの discipline、文学なら文学、歴史なら歴史の理論と方法をしっかり勉強して、それを生かして研究して欲しいんですよ。ひとつの discipline の知識をある程度身につけてから、違う学問分野をかじってみるのはいいんですよ。大学院生は別ですよ。でも、学部生の段階では、やはり、ひとつの discipline に集中して、しっかり勉強して欲しいんです。

もう一つ、言いたいことがありました。ダートマス大学の日本語コースの話なんです、1～2年生は専任講師が教えています。この専任講師の人たちですが、先ほどの話にあったジョーデン先生のワークショップを受講した後、どこかの大学で日本語のコースを立ち上げて、同時に修士号を取って、その修士号を持って、今度はダートマス大学に就職してきます。それで、1～2年生の日本語を教えています。言葉の先生という意味ではプロなんですよ。しっかりしたプログラムができていますが、それにプラスアルファを付け加えたいですね、私は(笑)。先ほど紹介したような、歌を聴いてその中に出てくる文法パターンと単語を覚えることも大事ですよ。でも、それだけで終わるのは寂しいですよ。言葉を覚える体

験の中で、学生たちに、言葉の裏にある文化を理解させる、言葉を覚える他に何を吸収させるのかも考えて欲しいわけですよ。でも、このことは、漢字クイズではできませんからね（笑）……というような問題にぶち当たるときもあります。

【阿部】 今のお話は、日本での英語教育が抱える問題と共通していると思います。大学でも、TOEIC や TOEFL の点数を上げるとか、英語を話せるようになるトレーニングをするとかですね。中学校や高校でも、「使える英語」を教えていないことが問題だとされているとかですね。大学の初年次教育で、「使える日本語」を教えることにもなっていると思いますが……「使える」ということは何を意味するのかなと思うんですね。おそらく、英語の場合は、先ほど言いましたように話せることだと思いますが……、それはさておき、日本でも、言葉は使えるけれども、実際に言葉を使って、自分が興味あることを探求、研究するか、理解するかということがないですよ。たとえば、日本人が、大学のアメリカ学科とか、外国語大学にあるような英語学科、フランス語学科などで勉強して、言葉はマスターするけれども、その後、何をしようか、何に興味を持って研究しようかということがないように思います。まさに TOEIC、TOEFL の点数をあげることが「専門」ですよ。実際、ビジネスの現場でも、話すことでも書くことでも、言葉を活用できさえすれば、言葉がわかればいいのだという考えで、コミュニケーションの背景にある異文化理解をどうするかということに関心がないというか、軽視しているというか……。

【ドーシー】 共通点、ありますね。

【阿部】 はい、共通点、日本の英語教育の問題と、ドーシー先生のお話と重なる部分がとても多いかなと、同じではないかと、興味深くうかがっていました。

【ドーシー】 今から 20 ～ 30 年前、大学を卒業したばかりの頃、岐阜県の公立中学校と高校を回って、その先生たちと一緒に、チームティーチングという形で授業をしていたときの話ですが、中学生、特に中学 3 年生は、結構、英語を喋れ

るんですよ。簡単な日常会話はできるんですよ。しかし、不思議なことに、高校2～3年生に、それもできなくなるんです。たぶん、私が回っていた学校が、進学校というんですか、進学校で、しかも大学受験がとても激しい時代で、生徒たちは単語を数多く覚えるのに必死で、それを文章の中でどう使えばいいか、考える余裕もないんですね。そうしているうちに、中学校で喋れるようになった英語を忘れてしまう……もう寂しい状況ですよ。今はわかりませんが、昔はそうでしたね。

【阿部】 おそらく、今でも状況は同じだと思います (笑)。私はドーシー先生から教わった岐阜県の中高生と同じ世代ですから (笑)、確かに昔もそうでした。高校生になって、単語やイディオムを覚えることがイコール英語の勉強だと考えられていて、そのうち、英語を喋ること、いや読み書きもどんどんできなくなる。まさに、話すときに、単語を覚えていても、口から身体から出てこない、読み書きに生かせなかったですね。

日本の英語の授業だと、発音なんかも結構いい加減に教えているというか、時間をかけて丁寧に教えていない印象もあります。もちろん、全てそうだとはいいませんよ。これは、喋ることを教えるのに時間をかけていないとされる問題とも関係していると思います。

先ほどのドーシー先生のお話にあった、ジョーデン先生のいわゆるヘボン式ではないローマ字を使って教える話ですが、日本でも、英語の参考書みたいなものや、先生によっては、漢字に仮名を振るように、英単語にひらがなやカタカナで読み方を振るようなことがあるんですね。それは、本当の英語の発音になるのか、文化という極端ですが、発音そのものにもプラスアルファがあると私は思っていて、これは先ほどのドーシー先生の話と重なると思うんですが……。

【ドーシー】 でも、英語の言葉にカタカナの発音記号を入れるのは、まだわかるんですよ。日本語は難しい言語ですが、発音はそこまで難しくない。ひらがなぐらいは、誰でも覚えられます。ひらがなは、そのまま読めばいいんですよ。英語はそのまま読めませんから。綴りと発音とが全く関係ない単語は、たくさんある

じゃないですか。そのような理由で、カタカナを発音記号として入れるのは、何となくわかります (笑)。でも、もちろん、正しい発音にはなりませんからね。

【阿部】 英語でも、たとえば、海の「sea」と彼女の「she」との区別がつかないとかですね。

【ドーシー】 すぐに小さい「イ」とか。

【阿部】 そうです。小さい「イ」や「エ」を駆使して仮名を振ったりしますね (笑)。それでも、日本で、中学生だと、「She is」を「シーイズ [sí:iz]」と発音する生徒が、たぶん多いかなと思います、もちろん、私の経験ですが (笑)。それを「She [fi:]」ときちんと発音すると、他の生徒に「格好つけてる」と嫌みを言われるんですね。高校の頃の話ですが、先生に廊下で「君、何組だ？」と聞かれて、私は「2年C組です」と答えたのですが、そのときに、「C組」を無意識に「C組 [sí:gumi]」と言ったんです。そうしたら、近くにいたクラスメート何人かが、「C組 [sí:gumi]」だつてえ」と嘲笑したんですね。多分、日本人なら「シーグミ [fi:gumi]」というのが、正しいというか違和感がないと思うんでしょう。まあ、この場合の「C」は、言葉ではなく記号ですから、どちらでもいいんでしょうけれども (笑)。

日本の学校の英語教育で、発音に仮名を振ることや、発音の練習ひいては話すことを重視しないことで、英語として正しい発音をするほうが変わると思われることと、ジョーデン先生の「た、てい、とう、て、と」ではないですが、本物ではない変な日本語の発音を覚えてしまった話とは、シンメトリーな関係にあるのかなと思いました。発音ひとつとっても、プラスアルファではないですが、言葉の背景にあることにこだわることで、本当の意味で言語を学ぶことになるのではないかと、それはどの言語でも同じなのかなと思った次第です。

*

*

*

ドーシー先生と私とで少し議論をして、少しと言いながら結構喋ってしまいま

した。すいません。それで、今日お集まりのみなさんと、前半の講演はもちろん、今のお話も含めて、ご質問やご意見、感想、コメントなどご発言いただいて、ディスカッションの種にしたいと思うのですが。どなたか、ご発言はありますでしょうか。ご遠慮なさらずに、ご意見をいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。記録の関係もありますので、先にご所属とお名前を話していただければと思います。

【山本】 ドーシー先生、今日はありがとうございました。とても興味深いお話でした。

【ドーシー】 恐縮です。

【山本】 成城大学で教員をしております山本と申します。よろしくお願いします。ドーシー先生の area studies に対する少し懐疑的なスタンスは、僕もとても共有するところがあります。実は、area studies に対するドーシー先生の懐疑的なスタンスが、今日のプレゼンテーションにあった、日本研究のアルケオロジーにしても、日本語教育の変遷にしても、ラインがずっと一つあったなと思っていて。それは、最初にドーシー先生が、「表現」という言葉を使うべきか、「表象」という言葉を使うべきかという問題と、密接に関わっているのかなと思っていて。たぶん、先生は、今日のお話を、表象、リプレゼンテーションという言葉でしたかったのではないかなと、聞いていて思いました。

それで、さっきの井上陽水の歌の話ですが……、アメリカの学生が、ああいう形で日本の曲をアレンジしてみる経験などによって、そのカルチャーというのが、ある特定の地域に、いつもずっとリアルなものとしてあるという考え方を、一度括弧の中に入れることができる。そのような経験を与えられることが、たぶん、とても大事なことだと思うんです。area studies って、メソドロジカルなエッセンシャルイズムを強く持っていると思うので、それをどう崩していくのかということと、日本語教育が、先生の実践の中でひとつになっていることを、とても興味深く思いました。

【ドーシー】 ありがとうございます。「表現」というよりも、「表象」、リプレゼンテーションという言葉を使いたかったのではという指摘は、もう、exactlyです(笑)。「表象」のほうが合っています。でも、シリーズのタイトルをうかがって、「表現」という言葉を使ってみても面白いかなと思っていました。area studies には、エッセンシャルイズムに繋がるところがありますね。結局、日本の経済の授業、歴史の授業、文学の授業、それぞれ対象とする国が同じ授業といっても、もちろん共通する部分もあるけれども、結局、その研究の中から生まれてくるものは、括弧をつけなきゃいけない「ジャパン」というものが出てきますね。あれは日本語でどう訳されたんですたっけ？ Benedict Anderson の『Imagined Communities』。

【阿部】 『想像の共同体』（書籍工房早山、2007 年）ですね。

【ドーシー】 完全にそういうプロセスが働いて、外国の日本という「想像の共同体」が作り上げられますね。それは、道具として使いやすいんですよ。しかし、理論、論理が生まれてきても、ちょっと危ないものになりそうで、やはり避けたいですね。

【阿部】 他にいかがでしょうか。

【乾】 今日は本当にありがとうございました。社会人向けに、大学院のキャリア情報誌を編集しております乾と申します。今日はありがとうございます。今日のお話、今のお話に関連してですが、ビジネススクールで英語を使うかどうかということに、とても近い話だなと思って、とても興味深くお話をうかがっていました。ビジネススクールの中で教えられることが、ファイナンスにしても、企業戦略にしても、経営戦略にしても、基本的にはグローバリズムの中で、世界共通の普遍的な内容であることと、英語で教えられることとをリンクさせているのですが、ただ、実際にビジネススクールで、現在課題になっているのが世界共通のことだとすると、本来求められるべき、たとえば(アメリカの)イノベーションや、(日本の)カイゼンとかいうのが、教えられなくなってくると。それは、それぞれの

国の文化にいわば埋め込まれているものになっているので、それを知るためには、ロンドンならロンドンの論理で、フランスならフランスの論理、日本なら日本の論理で教える。それで、それぞれの国の論理を、今度はアメリカに持っていくと、なにがしかイノベティブなものになるんですが、英語で教え始めた瞬間に、その教育ができなくなってしまうというような課題があるのと、今日のお話をうかがっていて思いました。

道具としての日本語のみを使っていくことで、日本の文化がかえって教えるくなる、そのような教育方法をどうやって乗り越えるかというお話をされているのかなと、本来の文脈とはかなり違う、どちらかという、トランプ大統領のような、あんな感じの、えぐいビジネスマンの方々がお話されていることと、課題の意図としては近いのかなと考えながら、お話をうかがっていました。とりとめの話ですいません。

【ドーシー】 ありがとうございます。今のビジネススクールの話ですが、やはり普遍的な知識や理論があれば、その文化の中、一つの言葉が話されている文化の中での、独特なルールもあるということで思い出したのですが……、たぶん、ニューヨークタイムスで読んだことがある記事ですが、日本の企業が1980～90年代に、優秀な若手のサラリーマンをアメリカに行かせてMBAを取らせるということがありました。しかし、その人たちが日本に戻ってくると、ビジネススクールで覚えたことが、日本のビジネス文化では上手く機能しないこともあったり、また、アメリカのビジネススクールの中で社会化されるのもあって、日本の会社のカルチャー、特に縦社会のようなものに、上手くとけ込めなくなってしまうのがあって、アメリカのビジネススクールに若手社員を送る企業が少なくなりました、という報告書かな。新聞で読んだ記事があって、とても面白く思いました。ダートマス大学にもビジネススクールがあって、Tuck School of Business というんですが、そういえば日本人が少なくなったと思いました。

【乾】 今のお話に関連して面白い話がありまして、そのMBAに通って、日本に

帰ってきた方々が、この5～6年ぐらい、10年ぐらいですかね、ソニーとかもそうなんですけど、ビジネススクールに行ってきた世界共通経営みたいな知識に基づいたシステムを導入した会社のほうが、成長力が落ちているというのがあります。国内オンリーで追求していたようなトヨタさんのほうが、むしろ業績を維持していたり成長していたりという、逆説的なことが現れているんです。面白いのは、ビジネススクールからデザインスクールに変わっていくような流れの中で、ハーバード大学にしても、むしろMBAを外してきている。アメリカのほうが、日本よりもビジネススクールを外してきているのが、今のお話と、とてもリンクしたような感じはしますね。

【ドーシー】 面白いですね。はい。色々、重なるところがありますね、はい。

【阿部】 今のお話、私も興味深かったんですが、経済学が、経営学もそうですが、英語で学ぶ、英語で研究成果を発信することがスタンダードになっていて、経済学を学ぶことの前提として英語があるんですね。経済学の場合、教科書も英語だし、極端な話、論文も英語以外の言語で書かれたものは、評価の対象外なんです。英語、とりわけアメリカで出版されている経済学のジャーナルに掲載された論文だけに価値があることになっているわけです。日本経済学会という、日本の近代経済学者が所属する大きな学会の学会誌は、1995年から『Japanese Economic Review』という名前になって、投稿論文は英語で書かれたものしか受け付けなくなっています。

経済学の研究者になるには、かなり前から、一度アメリカに留学するのがスタンダードになりました。経営学、ビジネススクールも、先ほどのお話の通りだと思います。ビジネススクールで教えられる知識や内容は、経済学以上にリジッドで、そこで学ぶ知識や方法が、アメリカの経営学の学説やケース・スタディが中心だったとしても、それが普遍的で正しいんだという雰囲気や文化が根強いように、私は思います。かなり偏見的でうがった見方ですが（笑）。

日本から見たときに、英語学習、英語運用能力に対する信仰、そして、アメリカのビジネススクールのメソッドが、先進的なものとして日本に入ってくるんで

ですが、ドーシー先生のお話にもあるように日本の社会に上手く溶け込まないのがありますが、私は、むしろ中途半端な形で、ゆがんで浸透しているように思います。アメリカから知識を持ち込む人たちは、日本のやり方、論理で上手くいっていることもすべて反古にしようとする。しかし、そこまではできないから、ゆがんだ形でメソッドや英語を使うということをやるので、むしろたちが悪い。「ゆがんだアメリカニズム」と言うのでしょうか、そのひずみが、グローバルという名のもとに、アメリカ型のビジネスの知識を信仰する日本の経済社会にはあるように思います。もちろん、徹底してそれまでの日本のやり方を反古にして、グローバルスタンダードを信仰する企業もあると思います。

だから、ソニーのような会社の方が、むしろ業績が落ちているというのは、とても面白い話だと思いました。グローバルスタンダードとされているようなビジネススクールの教科書の内容を生かした経営が駄目になっているというのは、面白いなと、とても興味深いことだなと思いました。ビジネススクールの教科書に載っていないことは、もはや正しくなくて……。

【ドーシー】 遅れてますよ (笑)。

【阿部】 遅れているという (笑)。それが言葉、特に英語に対する信仰みたいなものと、相まっているのかなと思いました。

他に何か、今のようなご意見や話題提供など、ご発言いただければと思いますが、いかがでしょうか。せっかくの機会ですので、遠慮されることはないと思いますので……、いかがでしょうか。

【東谷】 どうも。今日は遠い所から (笑)、どうもありがとうございます。興味深いお話をありがとうございます。共通教育研究センターの東谷です。もう少し、紹介していただきたいことがあるので、お願いしたいんですが、後半の日本語教育のお話の中で、ダートマス大学のお話が少し出てきていたと思いますが、どちらかというと、ドーシー先生ご自身の実践の話だったので、あえて、そうではなくて、ダートマス大学のドーシー先生が所属している学科の中で、どのよう

なカリキュラムがあつてというのを、少しお話しいただきたいと思います。僕は、ダートマス大学には、2 回行ったことがあるんですが、その中でとても感銘を受けたのは、ドーシー先生の学生さんたちの授業に出たことがありまして、そのとき、彼らと接していますと、大意はないんですが、どこから見ても日本語を喋るように見えない典型的なアメリカ人顔の好青年が、ベラベラと日本語で喋ってきて、「えっ？」っという感じと、それから、女子学生だったんですが、日本人の学生以上に妙な根回しがとても上手なんですよね（笑）。「なんでそんなに、よく日本文化を知っているの？」という感じのことをしてきた学生さんがいて、あとは、授業などの課外学習みたいなものがありましたよね。そういったものを、是非ご紹介いただければと思います。だから、どのようなカリキュラムを構築されているかですね。学校が与えている授業のカリキュラムと、学生が、よくわからないんだけど、どうしたらゼロから日本語をベラベラと喋り出せるようになるのか、ベラベラ喋っていることに、とても感動を受けましたので、それをご紹介していただけますか。

【ドーシー】 ありがとうございます。ダートマス大学には、1960 年代からすばらしい先生がいらして、2 年前に亡くなったんですが、ジョン・ラシアス先生。ラシアス先生は、1960 ～ 70 年代から、外国語教授法では一時かなり有名になって、テレビにもよく出演していました。アメリカ政府がバックにある PeaceCorps（平和部隊：教育や農業などの分野で発展途上国援助を目的とする米国の長期ボランティア派遣プログラム）というものがあって、その人たちの外国語トレーニングも、全部ラシアス先生がカリキュラムを組んでいたのですが、ラシアス先生がダートマス大学で長く教えていたお陰で、彼がプッシュしていたシステムがそのまま採用されて、形としてはいまだに残っているんですよ。先ほど話した「オーディオリンガル法」が中心になっています。そのような点では、ダートマス大学は、教授法の面ではやや遅れているところがあります。もちろん、先生一人ひとりとは違ったカラーを持って、違うやり方でやっているんですが。

ラシアス先生がダートマス大学に作ったシステムでは、外国語初級のクラスは、どの言語にしても、週 5 回、1 時間ずつの授業をやります。で、時間帯も決まっ

ているんです。朝の9時から9時50分。50分のクラス。初級の外国語のクラスは、必ずその時間帯に入れています。それで、週5回、それを受けるんです。1年生の初級クラスでは、教授、または講師が教えるその50分の授業に加えて、先輩学生の一人が、週4回、50分で、「ドリル」といって、先ほどの話に出てきた学生に繰り返し練習をさせるわけです。「昨日、図書館に行きました」、「病院」、「昨日、病院に行きました」、「本屋さん」、「昨日、本屋さんに行きました」と、先輩がそのような練習をさせるんですよ。ということは、初級の外国語の勉強は、週に合わせて約9時間になるんですよ。みんなとても上手になるから、「すごいじゃないですか、システム、きちんとできているじゃないですか」と言う人がいるんですが、昔からの古い教え方だとしても、週9時間もやっていれば上手になるんですよ。それだけ外国語に接しているから。そういうシステムになっているんですよ。

フランス語やスペイン語などヨーロッパの言語は、2年生からは、ほとんど教科書を使わずに、生教材というんですか、簡単な短編小説を読んだりするようになるんですが、もちろん、中国語、日本語、アラビア語では、それは無理なので、基礎文法を2年間かけて教えます。2年生からは、週におおよそ3時間、ドリルの授業はなくなりますが、週3時間やりますね。それで、まあまあ喋れるようになりますね。

で、課外学習の話も、さきほどの東谷先生のコメントにもありましたが、それは、各学科が自由にやっていいことになっています。日本語の場合は、Dartmouth Japan Society という学生たちのクラブがあって、日本語や日本のことが好きで興味のある学生たちが集まったり、週1回、火曜日の午後1時から、「日本語テーブル」というのがあります。学食の中にあるひとつの部屋を借りて、ご飯を食べながら日本語で話す。そして、その町にいる日本の人をできるだけ紹介して、その人の話を聞こうというのを週1回やっています。もちろんこれは、参加するかしないは自由なんです。

3年前に、学校全体の企画で、ある寮の中に、わりと新しくできた綺麗な寮の中ですが……、95パーセントぐらいの学生は寮生活をしていますので、寮の中に、Global village というのを作って、3階のこっち側がフランス語をやりたい学生、

3階のあっち側はイタリア語をやりたい学生、というのができていて、1階の右のほうは日本語なんです。学生が14人、そこに住んでいます。各 language の担当の先生がそれぞれきちんとそこにいて、その先生のポリシーで変わったりもしますが、イタリア語のエリアは、基本的にはイタリア語しか使ってはいけませんというルールになっていますが……、日本語はね、ちょっと flex（笑）。「できるだけ日本語使ってね」という感じでやっています。学生が日本語を使ったり、一緒にアニメを見たりします。だから、プラスの効果は間違いなくあると思いますね。

あとは、不思議なことに、ダートマス大学は、小さい町の小さい大学なんですけど、後輩が先輩と友達になったりすることがとても少ないんですよ。同じ時に入学した学生同士が、1年生の時に友達になって、それだけなんです。もちろん、スポーツをやったりクラブに入ったりしていると、先輩達と友達になったりするんですが、先輩と交流することが少ないんですよ。しかし、うちの Japan floor、日本語をやっている学生たちが住む寮の中はですね、4年生もいれば1年生も入ってきたりして、先輩がね、とても上手に指導するんですよ。たぶん、いや、たぶんじゃなくてなくて間違いないです。たとえば、私が、夏に学生が参加できる日本研修の話をしてね、興味を示さないけれども、先輩が喋ったらね、「あつ、行こう行こう行こう」となるのがあるんですよ（笑）。影響力ゼロなんですよ、私（笑）。そのような情報が、学生同士で広まるんですよ。Japan floor ではね、それがとても上手く機能していて、栄えてきたんですよ。Japan 関係の勉強をやっている学生の数も、少しは増えたしね……、という話です。

【阿部】 今のお話で、初級の日本語ですが、9時間という話でしたけれども、これはファースト・セメスターというか、入学してすぐのセメスターで、集中的に、回数が15回という感じですかね。

【ドーシー】 はい。

【阿部】 で、内容的には、やはり話すことが中心で、文法のようなことは、その

中では、何か取り上げたりはしないんですか。

【ドーシー】 まあ、話すのが目的で、さっきの教科書に書いてあった各チャプターには、二〜三つくらいの会話が紹介されていて、それを暗記してくる。それで、授業でひとまず、暗記した会話を学生に言わせる。それから応用編に入るという形が多いですね。だから、話せるようになることが目的なんだけれども、文法パターン中心に、行動主義的な練習、訓練をやるんですよ。で、学生がスラスラ、文章が言えるようになるんですよ。問題は、いつ、どの文法を使えばいいかわからないんですよ。1年生の日本語が終わった時点で、日本研修で日本に来る学生が多いですね。私が、ほとんど毎年、引率してきますね。学生たちの授業を見にいくと、みんなスラスラ、文章を言えるんですよ。それはなぜかという、今日は、このチャプターのこの辺をやっていますから、こういう文法を使えばいいと暗記してきて言えるわけですよ。しかし、日本にきて、同じ日本の大学生に会うときには、どのチャプターのどの文法を使えばいいか、どこにも書いていませんから、なかなかね、話せないんですよ。それが、日本に初めて来て、ぶち当たる問題です。そのような勉強の仕方をしていて、日本に初めて来た学生がぶち当たる問題ですね。不思議です。

【阿部】 日本人が、たとえば外国……、外国って変ですね、別の国に行くときに、やっぱり、同じような壁にぶち当たるというか。

【ドーシー】 あるんですか。やっぱり。

【阿部】 おそらくあると思います。学校の教科書や英会話の教科書には、空港でとか、ホテルでとか、シアトルに住んでいる中学生の太郎が主人公で云々、という状況で会話のスキットが書かれているのが多いですからね。

そこが、たとえば、日本人があれだけ英語を勉強しているのに、英語を話せないというふうな課題にも繋がっていると思います。これは、日本の問題だけではなくて、アメリカでも、とても悩んでいるんだということが、今日は、とても

よくわかりました。

【ドーシー】 ですから、私は、そこで困っちゃった学生たちに、いつも言うんですよ。積極的に、自分から話しかけるべきですよ。チャプター内のあの会話の、最初のフレーズを、言ってみればいいじゃないですか（笑）。教科書に出てきた答えが、意外に返ってきたりするんですよ。だから、逆説的なことですが、自分の外国語の力に自信が無ければ無いほど、積極的に出ていった方がいいという。ドーシー流の（笑）。

【阿部】 まさに日本でもそうだと思います。留学をなささいということも、そうだと思います。そろそろお時間がきているのですが、他にご意見などよろしいでしょうか。

【山本】 ちょっと、一つだけいいですか。

【阿部】 では、これで最後にしたいと思います。すいません。お願いします。

【山本】 繰り返すすいません。

【ドーシー】 いえいえ、お願いします。

【山本】 今日のドーシー先生のお話で僕が一番興味深かったのは、外国語を学ぶことがクリティカル・シンキングのレッスンになるということで、僕は、これはとても面白いと思います。ジェンダーのお話がありましたが、ジェンダーって確かに無意識のうちに埋め込まれているから、どうして自分がマスキュリンなのか、どうして自分がフェミニンなのかって、なかなか気づかないじゃないですか。しかし、それを外国語という回路を通じて、自分の中にしみ込んでいるジェンダーを、一つずつ批判していくという、そういうプロセスが、同時に、外国語学習、日本語学習にもなっているという、この、外国語学習とクリティカル・シンキン

グがセットになっている。この教育実践は、僕は本当に素晴らしいなと思いました。

【ドーシー】 ありがとうございます。それを目指しているんですよ。まだまだ未熟な私なのですが、少しずつ、そういう外国語の教え方をやりたいですね。日本語をやっている学生で、言葉と同時に吸収してしまう世界観や価値観で、特に顕著なものといえば、日本語の中の敬語です。敬語、嫌がるんですよ、アメリカ人は。「みんな、いい子じゃないですか。みんな同じ。なんで特別な言葉を使わなきゃいけないんだよ」と、まあ、そういうふうには言わないんですが、抵抗を感じますね。私も、上下関係を強調したい人間ではないんですが、正しく日本語を使うなら、上下関係を意識しないといけないので、一応、学生に敬語を使わせるんです。で、学生は、敬語を使ってくれるんですが、私を、必ずいじってくるんですよ。「先生、いらっしゃいました」とか言うんですよ (笑)。こんなトーンで、もう私を小馬鹿にしているわけですよ (笑)。あと「先生」。プロフェッサー同士では平気で言うんだけど、「～先生」と言うのに、なんとなく抵抗を感じている学生がいて、その中から必ず出てくるんですよ。私に向かって、「先生様」なんて言ったりして。ダブルで敬意を示して、結局ダブルで馬鹿にしているんですよ、私を (笑)。そういうのがあるんです。

だから、これからの自分の課題の一つとしては、日本語を覚える中で、その言葉の中に表れている上下関係を身につける体験で、他に何が学べるのかは、今考えている最中です。

【阿部】 その成果は、また機会があれば、是非お話をうかがいたいと思います。

そろそろ、このワークショップも終了予定の時間になりました。最後に、本日公開FDワークショップを企画しております、共通教育研究センターのセンター長であります相澤正彦先生から、一言、ごあいさつをいただきたいと思います。相澤先生、よろしくお願いします。

【相澤】 みなさん、もう、和気あいあいとお話をされているので、かしこまった

あいさつというのも変ですが……、今日は、みなさん、年度末の本当に忙しい時にお集まりいただいて、ありがとうございます。ドーシー先生も、日本滞在が、あと7ヶ月しかないんだと、先ほど聞きまして……、短い日本滞在の時間の中で、こちらのワークショップにおいでいただき、本当にありがとうございます。

このワークショップも、今回が7回目ということで、随分定着してきたんだろうと思います。この頃では、学外からのお客さまも、たくさんいらしてくださるようになりまして、特に遠方からいらしている方もおられるということで、本学としても、大変喜ばしいことだなと思っています。

このワークショップは、今日のような、こういう雰囲気になるというのが、一番望ましいのかなと思います。このような表現教育ということは、きちんとしたセオリーがあるわけではございませんので、かえって、このように話し合って、そして考えていくということが、一番有効なのかなと思います。今日のドーシー先生のお話も、言葉の教育というんでしょうか、これがいかに難しいかということとを、改めて感じさせてくださったというように思います。やはり、言霊ということですかね。「こういう言葉で伝えよう」ということを考えるのは、やはり至難の業です。しかし、それでは駄目だと最初から思っていたら、なんにもならないということですね。このワークショップのテーマ、特に、今日のお話のテーマである言葉の教育をどうしていったらいいのかというテーマも、本学でも、本当に大きな課題だなと思います。その点、今日のドーシー先生のお話は、大変、参考になりました。大変、僭越ですが、有意義なお話であったと思います。

それで、ドーシー先生のお話も含めた今日のワークショップの内容も、来年度の『共通教育論集』に掲載することになっておりますので、みなさん楽しみに、ご期待ください。それから、先ほどもお話がありましたが、来年度、今年（2017年）の4月に、共通教育センターが10周年を迎えましてですね、まだ10年、もう10年ということもありますが、ご案内がありますように、センターのスタッフが、「いま、教養教育を問う」という連続講演を企画しております。次回は3月4日、第2回目がございます。また、みなさんとお会いできることを、楽しみに期待しておりますので、こちらの講演会にも、また是非、ご参加いただきたいと思います。今日は、ドーシー先生、どうもありがとうございます。ご参会の

みなさんも、どうもありがとうございました。

（拍手）

【阿部】 相澤先生、ありがとうございました。では、本日のワークショップ、これで終了としたいと思います。今も拍手を頂きましたが、もう一度、今日ご講演いただきましたドーシー先生に、拍手で感謝の意を表したいと思います。どうもありがとうございました。

（拍手）

【ドーシー】 ありがとうございました。

